

オーストラリアへの思い ディジュリドゥの制作を通して

東日本大震災以降、オーストラリア、パースから福島の子どもたちに向けてたくさんの愛情が届けられ、その活動が現在まで継続的に続けられていることは、パースと福島県との間に育まれた友情が確かなものであることを表しています。オーストラリアでの大規模な森林火災は、たくさんの森林資源、農場が消失し、これらの再生には多くの時間も必要となります。そして新たな病魔との戦いは、世界中での対応が求められています。私たちはこれまでパースの皆さんから頂いた気持ちと同様、オーストラリアの皆さんに向け復興再生への祈りの気持ちを伝えるとともに、世界に向け力を合わせて難局に立ち向かわなければならないと思っています。

今回、制作したディジュリドゥは、日本とオーストラリアお互いの風土が築いた文化の融合を試みました。日本の漆文化は、大陸からの渡来人が様々な技術をもたらす以前、今から7000年以上も前から木の樹液である漆を活用してきました。天然素材である漆は、日本の中で独自の発展を遂げ、現在では日本を代表する工芸文化の一つとなりました。オーストラリアでも昔からの独自の文化が守られ現在まで引き継がれています。そして、人々がともに暮らし始めた頃から「祈り」は生活の中心にあったと思います。その「祈り」に思いをよせ、未来の人々も手を取り合い、豊かな気持ちを持って欲しいという願いを込めて制作しました。

文様には日本で縁起が良いとされる鶴と松竹梅を合わせたデザインを考えました。松は長寿、竹は子孫繁栄、梅は厳しい冬の寒さの中で一番に春を知らせる花としての気高さを表します。それらを鶴がくわえ飛ぶ様を吉祥文として福島県会津漆器の伝統技法である朱磨き、平極蒔絵にて表しました。このディジュリドゥから奏でられる音色とともに、世界中の人々がお互いに助け合う気持ちを持つことができると願っています。

公立大学法人会津大学短期大学部
産業情報学科 井波 純
吾子 可苗
井波ゼミ一同